

第 59 回 IRIDeS 金曜フォーラム

日 時：平成 30 年 11 月 30 日（金）16 時 30 分～18 時 00 分

会 場：東北大学災害科学国際研究所棟 1 階 会議・セミナー室（仙台市青葉区荒巻字青葉 468-1）

テーマ：『北海道南西沖地震から 25 年、日本海・離島の災害研究』

1. 16:30-17:00 （発表 20 分・質疑応答 10 分）

タイトル：1993 年北海道南西沖地震津波の家屋被害と津波被害関数

話題提供者：越村 俊一 教授（災害リスク研究部門 広域被害把握研究分野）

発表要旨

1993 年北海道南西沖地震津波において、奥尻島青苗地区で実施した航空写真の判読による家屋被害の情報と津波氾濫解析によって得られた津波の流体力学的な諸量を統合的に解析し、新しい津波被害関数を構築した。その結果、奥尻島における家屋被害は浸水深 1m および流速 1m/s で流失・全壊・大破率が 4 割以上、浸水深 4m、流速 4m/s を超えるとほとんど全ての家屋が破壊されることが分かった。奥尻島で得られた津波被害関数とスマトラ島 Banda Aceh で構築したそれとの比較においては、特に浸水深 4m、流速 4m/s までの被害率に大きな差が見られた。津波被害関数の工学的利用にあたっては、津波外力の局所性(津波氾濫流の時空間的な特性、氾濫流の衝撃力等)や漂流物の有無、家屋の構造といった様々な要因を十分に考慮する必要があることが分かった。

2. 17:00-17:30 （発表 20 分・質疑応答 10 分）

タイトル：地方紙における被災地報道の変化-北海道南西沖地震に関する 2 つの地方紙の報道から-

話題提供者：定池 祐季 助教（情報管理・社会連携部門 災害復興実践学分野）

発表要旨

1993 年 7 月 12 日に発生した北海道南西沖地震から 25 年が経過した。最大の被災地であった北海道奥尻町では、発災直後の 1 年は報道が集中し、その後 3 年、5 年といった「節目」に報道量が増加するものの、全体数としては減少していた。しかし、東日本大震災後には報道量が増加し、東北被災地と関連付けた内容が報じられるようになってきている。本発表では、北海道新聞と河北新報記事の計量テキスト分析をすることにより、地元被災地に関する報道の変化を紹介する。

3. 17:30-18:00 （発表 20 分・質疑応答 10 分）

タイトル：災害と共に生きた島々

話題提供者：川島 秀一 シニア研究員（人間・社会対応研究部門）

発表要旨

日本の島々は、閉鎖性と海洋性を併せもつ独自の文化を築いてきたが、それは島国日本の文化を考えるにあたって、重要な視点を導いてきた。自然災害に対する考えかたや対処の仕方にも、島の風土から生まれた文化に規定されている面がある。本発表では、火山の島と漁業との関わりとして三宅島や桜島を、ネズミの害を被った島として愛媛県の日振島と戸島、台風では沖永良部島、津波では池間島などを事例に、島々の災害文化を紹介する。

司会・進行：佐藤健 教授（情報管理・社会連携部門 災害復興実践学分野）